

『「国語教育」か「日本語教育」か、それとも——日本語国際化への対応』

長崎大学 尾崎 洋 二

この度、国語教育学会長崎大会でのシンポジウムでシンポジストをとの依頼を受けたのですが、私自身は国語教育についてはまったくの素人で、正直に言って戸惑っています。

私は、これまで30数年間、科学者（天文学者）として生活を送って来ました。また、研究論文は英語で書いておりましたので、国語教育あるいは日本語教育についてあまり深く考えたことはありません。

実行委員長の安河内先生からの依頼書に「日本語指導の必要な外国人の子は公立小中高校で18,000人を超えた」という文がありました。そこで、私自身が海外で外国人として過ごした体験、特に海外滞在中に自分の子供達をフランスとドイツの現地の学校に入れた体験についてお話しして、滞在先での国語教育について感じたことをお話できるかと思うようになりました。

フランスとドイツはお隣同士の国ですが、自国の言語に対する考え方は大いに違っております。フランス人はフランス語に対して強い誇りを持っており、フランス語（国語）教育を極めて重要視しています。一方、ドイツでは言葉はコミュニケーションの手段であり、キチンとコミュニケーションが出来れば、特に自国語ということにはこだわらないように見えます。実際、ドイツで

は研究所などの研究会でほとんどがドイツ人の出席者でも、外国人がほんのわずかでもいると、英語に切りかえるという場合にしばしば出会いました。

また、海外に滞在して感じたことに、人間の思考が言語と密接に関係しており、その国の文化が言語なくして語れないということです。そういう意味で、日本の文化は日本語と深く結びついていると思います。シンポジウムの際にはそんなこともお話ししたいと思います。